

第二節 大化の改新と律令政治

第二項 律令制の成立

ページ。

白鳳の大地震 天武天皇十三年（六七〇）十月十四日大地震がおこり、国をあげての大騒動となった。『日本書紀』はその模様を次のように伝えている。

逮乎人定大地震。拳闘男女唱不知東西。則山崩河涌、諸国郡官舍及百姓倉屋、寺塔、神社、破壊之類不可勝数。由是人民及六畜多死傷之。時伊予湯泉没而不出。土左国田苑五十余萬頃、没為海。古老曰、若是地動未曾有也。是夕、有鳴声。如鼓聞于東方。有人曰、伊豆嶋西北二面、自然増益三百余丈、更為一嶋。則如鼓音者、神造是嶋響也。

いわゆる白鳳の大地震といわれるもので、土佐では五十余万頃、今日のおよそ二二平方キロメートル（二二五七町歩）の田畑が海中に没したという。沢村武雄氏は、その著『日本の地震と津波—南海道を中心に—』のなかで、高知県内各地の口碑を紹介しながら次のように述べている（同書五九—六二ページ）。

五〇万という数字があまりにも大きいので、県内のあちこちらの口碑に残る云い伝えがある。なかでも黒田郡の話はおもしろい。

「白鳳地震陥没の地面は、東の方室戸岬より西の方足摺岬に達する黒田郡と称する一円の大地なり。」

とし、黒田郡を黒田、里土、上鴨、下鴨の四郡に分石高二十六万石程の地」というこまかいものや、陥没の音が京都まで聞こえたという大変なおまけ付きのものまである。

これについて、高岡郡に残る云い伝えが多く、
「昔、大良千軒、小田千軒などいえる繁榮の市あり、白鳳地震の時陥没して今海底に帰せり。」

というもの、須崎海上大坊千軒の鴨神の伝説、野見・大谷・久通などの山上の古墓の伝説、仁井田の高岡神社の伝説がある。もう一カ所高知市近傍があげられているが、高岡郡や高知市のもは、陥没面積はほほ妥当なものようである。

それでは、実際に陥没したのはどこであろうか。四国の地質を二〇年も調査されたおなじみの故江原真伍博士は、高岡郡高岡町（今の土佐市高岡）西部をあげ、今村明恒地震博士ほか一、二の学者は、高知市東部をあげている。昭和の南海地震でも、高知市東部は約一五平方キロにわたって地盤沈下のため浸水しており、高知市東部の場合は、南海地震ごとに必ず起こっている現象なので、わたしは、白鳳の場合も高知市東部に軍配をあげたいように思う。

しかし、高知市から高岡郡にかけての沿岸は、地盤の沈下地帯であって、昭和の場合も、一・二—一・五メートルの沈下が起こっている。したがって、白鳳の場合は、高知市だけでなく、高岡方面にもそのような現象があったとしても不思議ではない。

最も妥当な考え方は、高岡郡の沿岸は、その後の南海地震でも沈下が起こって、口碑によるような諸施設の海底沈下となったということである。口碑そのものが白鳳地震の後世になってつくられたものであるから、一地震だけの陥没と考える必要はない。

だいたい陥没という言葉そのものが誤解を招きやすいのである。浸水した場所だけが落ちこんだのではなくて、四国全般にわたる大地震運動の結果、沈下側のゼロ・メートル以下になった部分が海面下に没したのである。高知市の陸地の部分も、地盤が一メートルばかり低くなって浸水しやすくなっていることを忘れてはならない。

白鳳地震の地震津波は、宝永・安政・昭和のものと同一のものであったが、その勢力の強かったところから、次のような口碑がある。

高知市街の入口なる浦戸港の北方を孕という。距離六、七町の小海峡をなす。白鳳大變の時、大浪南方より打寄せ、この山脈を蹴破りて小海峡をなせしが、当時その打欠きたる山の一部をば、なお潮勢にて北に押流し、孕より二十丁程北方に坐らしめたり。これ今日の比島なり。

口碑も、こうなるとあいまいきょうがある。

この白鳳の大地震ののち、二百年あまりたった仁和三年（八二七）にも、白鳳時代以上の大地震がおこっている。

しかし、どうしたわけかこの仁和地震については、土佐に関する記録を欠くばかりか、口碑も伝えられていない。